

## 中間評価を軸としたPDCAサイクルを効率的に循環させる学校評価

札幌市立北野小学校 代表者 校長 高田章夫

## I はじめに

「なぞる教育」から  
「創る教育」へ

## 1 本校における学校評価のねらい

学校が裁量権を発揮することで自主性・自立性のある学校経営を進め、自校の責任において教育活動を行う時代となった。社会や地域、保護者の期待に応えるためには、学校の教育力を高めていかなければならない。学校の教育力を高めるためには、次の2点が大切と考える。①学校評価を活かし、「なぞる教育」から「創る教育」へと意識を変える。これまでの教育活動を見直し、より効果のあるものへと改めていく。②みんなが知っている（情報の共有化）、みんなに対応する（指導の共通化）ことを大切にする。我々、全教職員は「チーム北野」として、学校評価を核とし、「学校を創るのは自分たちなのだ」という共通認識のもとで一丸となり、より北野小らしい教育活動を展開していかなければならない。

## 2 昨年度の学校評価の結果をもとにした5つの改善点

教職員の自己評価と外部アンケート（保護者・児童）をつきあわせ、評価が低かった以下の5つの課題について議論し、改善へ向けて取組を進めた。

## ①積極的に挨拶できる子どもを育てる

- ・教職員が児童に進んで手本を示す姿勢を定着させた。
- ・年間を通して挨拶の励行を啓発する掲示物を作成した。
- ・児童の学年委員会の活動に挨拶運動を組み込み、自主的な取組をさせた。

## ②きめ細やかな指導で一人一人の学力を向上させる

- ・TT・少人数指導授業などの複数教員配置による授業形態を推進した。
- ・児童の学習進度や興味に合わせたグループ別の学習を行った。
- ・出前授業など外部から派遣された人材を活用する体験的学習を増やした。

## ③朝の発展タイム（習熟の時間）の様子を家庭や地域に発信する

- ・土曜参観日に発展タイムの様子を公開した。
- ・学校HPで取組の様子を随時公開した。
- ・使用したプリントに「発展タイム」と明示して活動内容を知らせた。

## ④学習のルールを徹底する

- ・指導部で示した「学習の10のルール」を全学級に掲示した。
- ・定期的に「学習の10のルール」の取組の様子を振り返る機会を設けた。

## ⑤安全に対する意識を育てる

- ・年間安全指導計画の作成に着手した。
- ・保護者引取訓練とともに「親子安全マップ作り」を実施した。

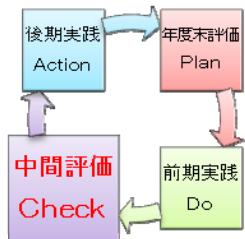
学校改善に結び  
付いた学校評価

## Ⅱ 具体的な取組

### 中間評価を軸としたPDCAサイクル

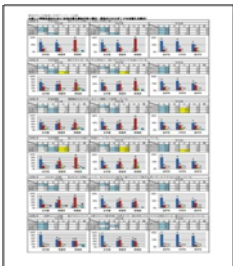


資料① 中間評価結果と後期課題



中間評価を軸としたPDCAサイクル

### 「学校マニフェスト」を発信



資料② 自己評価書と外部アンケート比較



資料③ 北野の教育活動ダイジェスト

## 1 後期につなげる中間評価

### (1) 中間評価を軸としたPDCAサイクル

昨年度の年度末評価で設定した課題（P）について、本年度の前期に取り組み（D）、中間評価（C）を行う。中間評価によって再設定した課題について後期に改善（A）を進め、年度末に再評価する。再評価した結果を次年度の課題に反映する。この評価のサイクルを繰り返すことで、学校経営方針の達成を目指す。

### (2) 職員全員による改善策の立案

中間評価の結果をもとに、学校評価委員会で喫緊の課題を5～6個に絞り込んで設定する。それを受け、学校評価全体会では、課題改善のための具体的な手立てについて教職員が議論し、知恵を結集する中で、納得された結論を導き出す。

### (3) 中間評価の結果と後期の課題を家庭に配付

中間評価の結果をもとに再設定した後期の課題は全教職員が共通理解した上で、一斉に改善に向けて取り組む。それと同時に、学校便り特別号として全家庭にも同様の内容を配付することで改善を約束し、さらに協力を求める。

### (4) 中長期ビジョンに立った評価

評価項目は学校経営方針に基づいて設定し、1年単位の評価を基本としている。方針に大きな変更がなければ、設定は継続され、評価の蓄積から変容を見取り、効率的な改善を目指すことができる。

## 2 学校の取組についての受発信

### (1) 学校・児童・保護者共通の評価項目

自己評価書と外部アンケート（児童・保護者）の共通の評価項目（21項目）の結果から、その達成度を多面的かつ包括的に検証する。またそれぞれの評価に大きな相違が見られる場合は、問題の有無を確認し、必要に応じて課題とする。

### (2) 外部アンケートにすべて回答する姿勢

外部アンケート（保護者）に設けた自由記述欄に書かれた内容についてはすべて真摯に受け止め、改善につなげる。中間評価の結果とともに学校側の回答を全家庭に配付し、学校への理解と信頼の深化につなげる。

### (3) 学校教育報告会で結果報告

後期の取組と改善の様子について保護者にプレゼンテーションソフトを用いて視覚的にもわかりやすく伝え、次年度も継続して取り組むことを約束する。また、年度初めの学校教育説明会でも新たに発信する。

### (4) 学校HPで広く発信

教育活動の様子を週1回更新し、また今年度より、公開した写真で綴った「北野の教育活動ダイジェスト」を全家庭と学校関係者評価委員に配付する。

### Ⅲ 成果と課題

「組織力」を高めるツールとしての学校評価

より効率的なシステムの改善を目指す



資料④校務分掌を活用した取組

#### 1 成果

##### (1) 学校課題の明確化と目標の重点化

目標が抽象的で不明確であれば、重点化されず多方面に力を割こうとして結局、改善には結び付かず、教職員にとって評価の意味合いは低くなってしまふ。そこで課題を明確化し、目標を重点化することにした。それにより、全教職員が学校の目指すビジョンを共有し、日々の活動の中で意識して改善に取り組むことができた。

##### (2) 教職員の意識改革

学校評価の取組が、学校運営や活動の改善につながり、子どもの生活態度や学習態度などにより変化が見られた。学校評価は「評価のための評価」ではなく、「学校づくりのツール」なのだと思われ、教職員の意識が変わり、自己評価の質の向上につながった。また、学校評価によって明らかになった成果や課題が次年度の学校経営方針に盛り込まれたことで、教職員の学校評価に対するモチベーションの向上につながった。

##### (3) 家庭・地域とのコミュニケーションツール

外部（保護者）アンケートで受ける評価や自由記述の内容は、保護者からの発信であり、それを受けた学校の計画や対応状況を発信することで連携が生まれ、開かれた学校づくりに寄与することができた。記述の内容が批判的なものにとどまらず、共感的なものが増えてきた（全体の37%）ことは、本校教育活動への理解が深まってきているといえる。

#### 2 課題

##### (1) 校務分掌を活用した取組の分担

学校評価の課題改善を教職員個人の力だけに頼るのではなく、内容に応じて適切な校務分掌に分担し、組織力を活かして取り組んだ。ただし、年度をまたぐ取組の一部が、引継ぎの不徹底により停滞することがあった。各分掌部長並びに学校評価担当者による周到的なチェックが必要である。

##### (2) 校務用ネットワークの活用

学校評価（自己評価）の必要性は十分認識していても、その事務処理の煩雑さで躊躇する場合がある。本校では、校務用ネットワークを活用し、誰もが簡単な入力で評価の結果をグラフ化できるなどの情報処理を行っているがまだ一部にとどまっている。今後、より効率的なシステムへと改善していく。

##### (3) 学校関係者評価委員へのアプローチ

学校関係者評価委員には、年2回の学校関係者評価委員会開催のほか学校行事や授業の参観機会の設定、学校便りの配付など評価に必要な情報提供を行っている。しかし、学校と委員が問題を共有するにはデータ不足であり、今後、評価の根拠となるデータ量（各種統計・調査結果、写真など）をさらに増やすなどの工夫をすることが必要である。